

福井市教職員目的別研修

～主体的・対話的に学び続ける教師を目指して～

はじめに

本市では、教職員が児童生徒と関わる際に必要な能力や豊かな人間性、コミュニケーション能力や学校現場・社会に関わることなど総合的な人間力の向上を図り、教育の専門職としての力量を高めることを目指した「福井市教職員力量向上研修」（以下「力量向上研修」とする）を行っている。この力量向上研修は、教職員一人一人が自分の資質・能力に応じて、対象となる研修から計画的にバランスよく選択し受講する「主体的な学びの場」としている。

本市が夏季休業中に主催している「福井市教職員目的別研修」（以下「目的別研修」とする）は力量向上研修の対象研修である。令和元年度までも「福井市教職員課題別研修」として長年行ってきたものであるが、令和2年度より力量向上研修を開始したことにより、受講方法と名称を改めた。

本稿では、令和3年度に実施した目的別研修の詳細について報告をする。

1. 本市が目指す資質・能力とのつながり

本市では、教職員に必要な資質・能力を「児童生徒に関わること」「人間性、学校現場、社会に関わること」の2大領域に分け、さらにA「学習指導」B「生徒指導」C「素養」「マネジメント」「人材育成」「連携・協働」の小領域に分けた上で、以下のように具体的な資質・能力を示している。

大領域	小領域	資質・能力	具体的な資質・能力
児童生徒に関わること	A 学習指導	教科等の専門性	・教科等を学ぶ意義の理解 ・教科等で培う力の把握 ・小学校外国語を指導する力 ・充実した道徳の時間のあり方
		授業力	・教科等の基礎的な指導力 ・主体的・対話的で深い学びへの理解 ・探究的な学びの計画、立案 ・ICTを効果的に活用する力
		福井の教育力を支える研究・連携	・福井の教育の特長の理解 ・ふるさと福井を大切に思う心
	B 生徒指導	幼児・児童・生徒理解	・子どもの理解の重要性の認識 ・子どもの発達段階への理解 ・一人一人に向き合う意識
		問題行動への対応	・個や集団への指導と手立ての理解 ・一人一人の子どもに寄り添う態度、子どもの声に対する傾聴 ・多様な子どもに対する寛容の心と態度
		特別な配慮への対応	・特別支援教育や外国人児童生徒等に対する支援の基本的な知識 ・発達障がいに対する知識、理解
人間性、学校現場、社会に関わること	C 素養 マネジメント 人材育成 連携・協働	教育的愛情、使命感	・教職への情熱 ・子どもに対する愛情
		倫理観、人間性、社会性	・高い人権意識 ・豊かな人間性、広い視野 ・社会人としての一般常識
		コミュニケーション力	・他者との意思の疎通と協働
		学び続ける力、探究心	・学びの専門家としての学び続ける意欲 ・多様な社会体験への挑戦
		学年経営、学級経営	・理想とする学級像の形成
		社会の変化への対応	・学校現場の現状の理解 ・社会情勢（国際情勢・多様性）に対する理解
		学校安全、危機管理	・学校安全、危機管理に関する基礎的な知識、理解
		人材育成	・様々な課題に対応する力
		組織における協働	・仲間と協働して、創造する経験 ・協働の良さを子どもに発信する力
家庭や地域社会との連携	・地域社会に貢献する経験 ・地域社会の中で子どもを育成する意義の理解		

前述した力量向上研修については「福井県教員育成指標」に基づき、教職員として自分は今のステージにいるか、今の自分に必要な資質・能力は何か考えながら小領域のA「学習指導」B「生徒指導」C「素養」「マネジメント」「人材育成」「連携・協働」に関わる研修をバランスよく受講することとしている。

そのため、本市が主催する目的別研修においても、教職員に求められる資質・能力を踏まえた上で、学校現場のニーズも取り入れながら研修を企画している。

以下は令和3年度に行った研修内容と講師・関係機関等及び領域である。

領域	(上段) タイトルや主な内容
	(下段) 講師・関係機関等
A	運動学習能力を育む コーディネーショントレーニング講座 市内NPOスポーツクラブ職員
	小学校外国語教育のコツ 前文部科学省外国語教育推進室専門職
A	これからの中学校英語のあり方 前文部科学省外国語教育推進室専門職
	授業のできる造形活動 ～石を磨こう～ 市美術館学芸員
A	プログラミングを体験しよう 市学校教育課指導主事
	まもるいのち ひろめるぼうさい 青少年赤十字賛助奉仕団、日赤福井県支部員
ABC	低・中・高学年・特別支援研修 (各成長段階の児童についてお悩み相談室) 市小学校教諭(授業名人)
	当事者と考える「こころのバリアフリー」 ～視覚障がい者編～ 社会福祉協議会、県立盲学校教諭
AC	イングリッシュ・サロン 市小学校専属 ALT
	ポブラディアを学ぼう！ 市立図書館司書

AC	ビブリオバトルに挑戦してみよう！ 市立図書館司書
	地球的・世界的視野をもつグローバル人材の育成をめざして 在外教育施設派遣教員、JICA 北陸国際協力推進委員
AC	「特別の教科 道徳」の学習指導と評価 前モラロジー研究所教育講師、前文部科学省教科調査官
	タブレットの使い方研修 市学校教育課指導主事
AC	ESDとSDGs(持続可能な社会の担い手を育てる教育) 市環境政策課職員
	B 児童虐待の現状と対応 県児童相談所、市子ども福祉課職員
BC	ゲートキーパー養成講座 臨床心理士
	誰もが自分らしく生きることを認め合う学校づくりのために(多様な性) 市女性活躍促進課
BC	学校に適應しづらい子どもとその保護者への支援 ～連携をめぐって～ 福井大学教授
	C 信頼を得る対応術～保護者の子供を思う気持ちとどう向き合うか～ コミュニケーション改善コンサルタント

2. 今日的課題について学ぶ —市の他課、他機関とつながって—

各教科の学習指導・支援に関する研修をはじめ、豊かな心を育てる体験活動の進め方、学校の今日的課題解決に向けての具体的な方策などについて、本市の他課や施設、企業、団体と連携しながら、実践的な研修の場を設定している。その一部を以下に紹介する。

①市子ども福祉課と県総合福祉相談所との連携

市子ども福祉課に講師を依頼し、児童虐待をテーマにした研修を実施した。県総合福祉相談所（児相）の職員に講師をしていただき、児童虐待の未然防止・早期発見のため、児童虐待の現状や虐待を見逃さないためのポイント、虐待が疑われる場合の通告方法、通告後の動きについて学び、事例検討を通して、虐待を発見した場合の対応についてグループで考えた。

②市女性活躍促進課との連携

近年、教育現場でセクシャル・マイノリティ（性的少数者）への関心が高まっていることを受けて多様な性をテーマにした研修を実施した。学校現場におけるLGBTQの児童生徒の実態や、LGBTQの方への適切な配慮、また、当事者からカミングアウトを受けた際の対応等について学んだ。

③市立図書館との連携

市立図書館司書を講師として招き、小学校4年生国語科の教科書（光村図書）に掲載されている総合百科事典の効果的な活用方法を学んだり、ワークショップ形式で実際にビブリオバトルを体験したりした。



④大学との連携

福井大学学術研究院教育・人文社会系部門教授を講師に招き、学校に適応しづらい子どもとその保護者への支援をテーマに研修を実施した。子どもへの支援を行うときに、保護者とどのような協力体制を築くとよいのか、学校側のスタッフ（教師やスクールカウンセラー等）はどのように連携するとよいのかなどについて、事例をもとに学んだ。

⑤県立盲学校と社会福祉協議会との連携

「こころのバリアフリー」をテーマに、視覚障がい者であ

る盲学校教員から、授業の中で子どもたちに伝えていることや大切にしている思いを聞き、視覚障がいに対する理解を図った。障がい理解や思いやりの心を育てる方法、今後の福祉学習の展開について学んだ。

⑥企業との連携

人材派遣会社のコミュニケーション改善コンサルタントを講師に招き、クレーム対応や保護者との信頼関係を作る具体的方策について、保護者対応時の心構えや保護者とのよい関係を築くための初期対応・電話対応など、ロールプレイを交えながら学んだ。

3. 即実践!授業に役立つ研修 —教職員同士がつながって—

参加する教職員の満足度の高い研修は、講義形式の研修よりも体験型の研修、または、参加者同士の学び合いの場が設けられている研修である。次に紹介するのは、実際に体験したり、教職員同士で協働したりしながら学びを深めた研修の一部である。

①市小学校専属ALTとの協働

気軽に英語を話す空間に来てほしいという思いを込めて研修名を「イングリッシュ・サロン」とし、市小学校専属ALTが講師となって研修を実施した。ALTが授業で活用できるアクティビティを紹介し、参加者は5~6人の小グループになって複数のアクティビティを実際に体験することで、アクティビティの進め方を容易に理解できた。また、体験を通して、英語で意思疎通ができた達成感を実感し、児童にも同じような思いを感じさせたいという思いをもつことができた。



② 栄養教諭との協働

福井市内の小中学校に勤務している栄養教諭が講師となって、食育をテーマにした研修を実施した。グループごとに実際に給食と同じ献立を調理しながら、学級給食の目的や正しい手洗い法など、学校給食における指導のポイントについて学んだ。また、給食の調理過程において、いかに衛生面に気を配っているか、調理師がどのような思いで調理をしているのかということについても知るよい機会となった。



③ 教員同士の協働

本市では、児童数の減少と地域性等の理由から、単学級の学校が増えている。また、市内ほとんどの小中学校に特別支援学級が設置されており、学校によっては1学級みの設置で、特別支援学級担任が校内で一人となっている場合も少なくない。新採用で赴任した教員や、異動して年数の浅い教員は、悩みや不安を抱えながら日々の業務に追われている。教員を支えるために企画したのが、「学年別研修」「特別支援研修」である。市内小中学校で勤務をしている「授業名人」（県より任命）の教員を講師として発達段階に適した指導の在り方についてアドバイスや助言をもらった。参加者は、日頃の悩みを吐露したり、自分の日頃の指導法について確認をしたりと、参加者同士が似た境遇であることから、構えることなく、積極的に話し合いに参加できていた。



4. 企画運営での留意点

(1) 研修の企画

目的別研修は、福井市教育委員会と福井市校長会・教頭会が主催している。そのため、年に4回（5月、10月、12月、3月）「福井市教職員研修企画委員会」を開催し、校長会や教頭会の代表と市学校教育課指導主事の研修担当が研修内容について協議している。管理職からは現場の教職員に必要な研修という視点から、意見やアドバイスをもらい、学校現場の実情に沿った研修を企画し実現できるようにしている。

(2) 研修の運営及び研修の共有

実際の各研修では、指導主事が2～3名で各研修を担当し、当日の準備や後始末、運営等を行っていく。また、研修の様子について写真と文章による記録を作成する。全研修終了後には、すべての研修記録をまとめ、次年度受講の参考となるように福井市教職員対象のイントラネットに掲載している。

(3) 受講者の研修記録

「はじめに」で述べた力量向上研修では、教職員各自が「研修記録シート」に受講した研修について記録し、保管するようにしている。目的別研修においても受講した教職員はこのシートに記録を残している。このシートは異動しても継続して使用していくこととしており、教職員は自分の研修履歴で、「いつ、何を、どのように学んだか」を確認できる。また、管理職は教職員との面談において、この「研修記録シート」を手がかりとして、バランスの取れた適切な受講について共に考え、活用している。

5. 今後の展望

(1) 魅力的な研修の実施

各研修後には、受講者に研修の感想と評価（4段階：大変有意義、ある程度有意義、あまり有意義がない、全く有意義がない）でアンケートを実施している。毎年、受講者からの声を真摯に受け止め、次年度研修に向けての改善や準備にいかしている。令和3年度の研修全体の評価は「大変

有意義であった」が約78%であった。

肯定的な感想のあった研修の多くは、すぐに実践できる内容のものであった。これまでと同様、子どもたちのプラスとなり、教職員にとって必要な内容だけでなく、受講者自身が好奇心や探究心を持って学びを自ら進めていく内容を提供していきたい。そのためにも、目まぐるしく変化していく社会情勢や教育現場の動きを常に把握し、現場の声に耳を傾けていくことを大切にしていきたい。

(2) 受講機会の拡充

令和3年度はコロナ禍の中での研修ではあったが、人数制限等の感染症対策を講じながら講師と受講者、受講者同士が顔を合わせられる集合型の形式を基本とした。しかし、夏季休業後半に感染が拡大したこともあり、この時期に実施を予定していた研修については、急遽、オンラインに切り替えた。グループ討議のしやすさから考えると対面（集合型）の方がよい場合がほとんどであるが、講義内容によっては、十分研修の目的を果たせるものもある。また、会場の規模や移動距離が問題にならないので、より多くの教職員に受講機会を提供でき、また遠方の講師に講義を依頼することもできる。今後はハイブリッド型などオンラインのメリットをいかして多様な受講方法を提供したい。

(3) 研修記録について

教員免許更新制の廃止に伴い、今年度、県より「研修記録シートパイロット版」が出された。今後、本市の力量向上研修の「研修記録シート」について再考し、国の方針に合わせた記録の在り方を検討していきたい。

な学びと協働的な学びを支援していく必要性を実感している。そして、福井市教育委員会が目的別研修を通して「学び続ける教師の伴走者」でありたいと考えている。そのためには、目まぐるしく変化していく社会情勢や教育現場の動きを常に把握し、現場の声に耳を傾けていくことが大切である。教師の学びたい気持ちや「つながり」を大切にしながら、主体的・対話的な教師の学びを実現する魅力ある研修企画となるよう努力を重ねていきたい。

6. おわりに

「令和の日本型学校教育を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）」では、教師は学び続けることが強く期待される存在であること、時代の変化に対応して最新の知識技能を意識すること、主体的に学び続ける姿が子どもたちにとって重要なロールモデルとなることが述べられている。

本市としては、一人一人の教師が安心して新たな学びに参加しやすくなるような環境の構築に努めるとともに、コンテンツや研修方法を常に見直し、現場の教職員の個別最適